

## 遺言

凍りつくような大気が明るみ  
都市の中に夜明けが訪れようとしている

肺の中で成長した痛みは冷やされ  
寒気の中に意識を薄め、私を慰安へと導く

「御前なんか居なくてもいい  
御前なんか居ないほうがよい」

吐き捨てるように口を出たそれらを  
私はいずれ、遺言として刻むことにしよう

社会的敗残者として生きること  
その中で彫琢し続けること

何ものをも失っていない  
ただ、涙がとめどなく流れ伝うだけだ

哀しむべきは彼らの荒廃した風景  
その中にあって、この陽光は、ひたすら目映い

波に飲み込まれ、あるいは銃弾に倒れた者たち  
それを拾い集める者の合掌——

我々は何故、打擲されなければならないのか  
我々は何故、互いに蹴落とそうとし合うのか

合掌した両手を膨らませ、そして花開くがいい  
そこに降り注ぐ陽光を感じるがいい

ああ、お前が誰に必要とされているのか  
それを、はっきりと知ることができるだろう

(2011.12.28)